

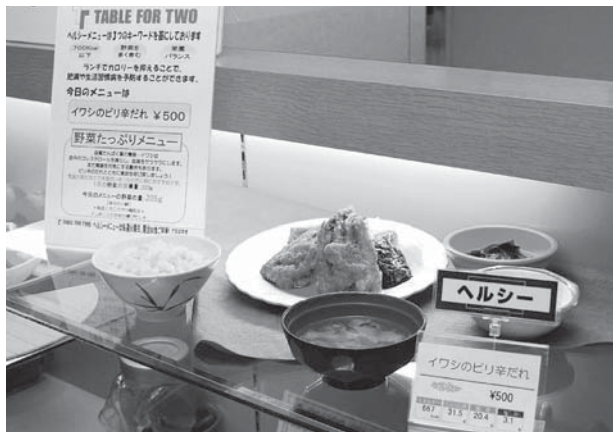
1食20円の寄付で 発展途上国に食料を提供する活動

report

参加型・社会貢献のしくみづくり / TABLE FOR TWO事務局



私たちが普段のランチに健康食を1回選ぶだけで、
飢餓に苦しむ子どもの給食1食分がまかなえる
(上・左写真提供：東京ガス(株))



あなたが
ヘルシーランチ
1回食べることで、
誰かが給食1回
食べられるという
世界の新しいしくみ。

同じ地球上に、飢えに苦しむ人と食べ過ぎて不健康な
人があります。この相反する問題を同時に解決
しようと思えたのがTABLE FOR TWOです。
当プログラムのヘルシーメニュー1食につき
20円が、開発途上国の給食1食分として寄付
されます。時空を超えて二人で食べよう。

TABLE FOR TWO
www.tablefor2.org



支援国での進捗や
成果を参加者に伝える
ことも、活動を支える
大きな要素。ポスター
やHP、ツイッターなど
で臨場感のある報告
を心がけている



1食20円の寄付が実現するアフリカなど発展途上国
への影響は想像以上。子どもの就学率の向上、初
等教育の徹底や学力アップを支援する効果も大きい
(写真提供：TABLE FOR TWO)

世界の飢餓と 飽食の同時解決をめざす

社員食堂のメニューに加えられた、野菜中心で低カロリーのヘルシー食。これを注文すると、売上げのうち20円が発展途上国の子どもたちに学校給食を提供するために使われる。このしくみを発案し、運営するのが特定非営利活動法人のTABLE FORTWOだ。

活動の発端は、2007年の「世界経済フォーラム」で発展途上国の飢餓と先進国の飽食が討議されたこと。日本から参加したグループの中から、これらの同時解決をめざして現在のアイデアが生まれた。

従来の慈善事業と違うのは一方的な寄付ではなく、先進国側にもメタボ対策など健康上のメリットがある点。発足からわずか4年で、現在では約450社の企業や学校、レストランが参加しており、さらにアメリカをはじめ海外にも活動は広がっている。

その理由を代表の小暮真久さんは、「しくみがわかりやすく、誰でも参加しやすいからだと思う」と語る。当初は寄付金の一部を運営費に充てることに反発の声もあったが、後押ししたのは導入に関わった企業の担当者やメニューを作る人など一人ひとりの声だ。「良いしくみが続けるには運営費は必要だし、うちはこんな風に導入しています」と、参加企業から次の参加企業へと熱心に薦めてくれたという。

社員の参加率が高いためCSR活動として導入する企業が増え、近年では参加企業同士



大学生ボランティアによる中学校への出張授業。
世界の食糧事情を理解してもらうことで食育にも貢献する



食事の写真を撮影してアップロードするiPhoneアプリも展開。画像から推定カロリーや栄養バランスを自動解析し、ヘルシー食と診断されると協賛企業からアフリカへ学校給食が寄付されるしくみ

TABLE FOR TWOの活動に参加する大学生組織によるイベント。
フットサルのプレー参加費がアフリカの子どもたちに給食を届ける寄付金に



バイオ研究からコンサルティング会社、映画会社を経て、TABLE FOR TWO代表に就任した小暮真久さん。根底には「人の命を支える仕事をしたい」という想いがある

「TABLE FOR TWO事務局」問い合わせ先

info@tablefor2.org
http://www.tablefor2.org/

の交流にも力を入れる。「CSRの担当者は孤軍奮闘していることが多く、他社との情報交換はとても参考になると喜ばれます。点を線にして、もっと有意義な活動にしていきたい」という意向だ。

企業のほか、全国で千人以上の大学生が参加する学生団体を持つのも大きな特色。社会貢献という肩肘張った志というより、自らの勉強会を開催したりと自立した組織へと育っている。また、保育園などの参加も徐々に増え、このしくみを通じて「感謝して食べる」「食べ残しをしない」など体験型の食育教育にも貢献。昨年末には世界の食事情がわかる絵本を出版し、多角的な展開が始まっている。

常にジレンマなのは、社会の役に立ちたいという情熱と、ビジネスとしての採算性の両立。一見難しいように思うが、「人には何かできることをしたいという根源的な願いがあり、活動に共感いただけると驚くほど力を貸してくれる」というのが小暮さんの実感だ。「自分たちができるのは誠心誠意、感謝を伝えることだけ」ということで、人間としての根本に触れる心のやりとりが多くの人を動かし、参加者の増加につながったといえるだろう。

世界食糧サミットなどが掲げる、すべての世界の飢餓をなくす目標は2025年。それに向けて、柔軟でスピーディーな日本発の新しい社会貢献のしくみがますます広がっていくことを望みたい。

(文責・CEL編集室)

CEL